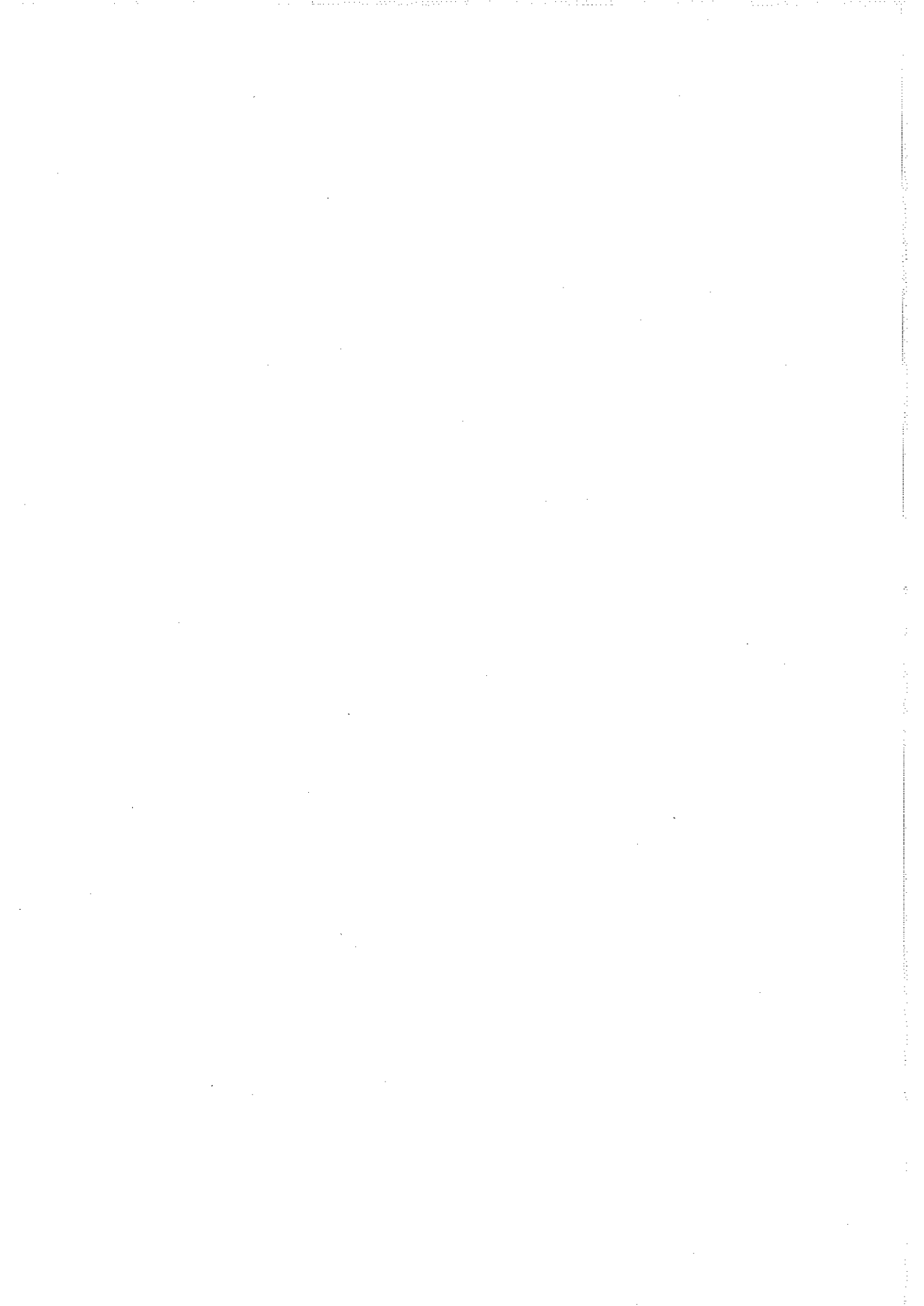


# 宇治市街遺跡第2次発掘調査概報

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第8集)

1985

宇治市教育委員会



## 例 言

1. 本書は、宇治市街遺跡第2次発掘調査概報である。
2. 調査地は、京都府宇治市宇治壱番29番地である。
3. 現地調査は、昭和59年11月1日より昭和60年1月31日まで実施した。
4. 調査組織は下記のとおりである。

調査主体者	宇治市教育委員会	
調査指導者	宇治市教育委員会教育長	岩本昭造
調査指導者	元近畿大学教授	杉山信三
調査担当者	宇治市教育委員会社会教育課主事	杉本宏
調査事務局	宇治市教育委員会参事	木村光長
	同 社会教育課長	小林巧
	同 文化係長	伊藤忠正
	同 主事	吉水利明
	同 主事	小西弘子
調査補助員	奥田耕三、猿向敏一、岩本俊也、岸本弘司郎、佐原耕、上村和也 樋口秀一、鐘方正樹、成清利彦、中尾由香利、古川小百合	
調査協力	京都府教育委員会、奈良不動産株式会社	

5. 調査期間中に下記の方々の御指導・御協力を得た。記してお礼申し上げる。  
佐原 眞(奈良国立文化財研究所)、中野益男(帯広畜産大学)、吉岡常雄(大阪芸術大学)、  
鈴木重治(同志社大学)、平良泰久・奥村清一郎(京都府教育委員会)、松井忠春・伊野近  
富・小池 寛・荒川 史(京都府埋蔵文化財調査研究センター)、水野和雄(福井県立朝  
倉氏遺跡資料館)、中司照世(福井県教育委員会)、若原英弋(京都府文化財保護指導委員)、  
宇治市歴史資料館、第4連合町内会、第7連合町内会、五番町町内会、御旅町内会、社  
町町内会、折居道町内会、本町町内会 (順不同・敬称略)
6. 土器図中のアルファベットは次の器種を示す。H：土師器、Z：瓦器、T：陶器、HC  
：白磁、BC：青磁、S：石製品、R：瓦。
7. 本書の編集・執筆は杉本が担当した。

## 序

宇治市街遺跡は、平等院から国鉄宇治駅・宇治警察署を含む旧宇治市街一帯に広がる範囲であります。

本遺跡の調査は、昭和56年に京都銀行宇治支店の増築に伴う発掘調査を第1次として、今回の調査は第2次調査にあたります。調査面積は250㎡程度であります。平安時代から室町時代に至る住居跡・道路・石垣等が多数発見されました。なかでも大甕を多数土中に埋めた跡は、「ミソ」・「タマリ」生産に関係したことがわかり、宇治の歴史を解明するうえで貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、本調査はマンション建設に伴う事前調査であり、事業者の方々のご理解とご協力を得て調査ができましたことに対し深く感謝の意を表すとともに、調査や本書作成にあたり種々ご指導・ご協力いただきました関係各位、並びに調査に従事していただきました方々に心からお礼申し上げます。

昭和60年3月30日

宇治市教育委員会

教育長 岩本昭造

# 1. はじめに

宇治市街遺跡は、宇治川西岸の現在の宇治市街地一帯に広がる集落跡である。遺跡の成立は平安時代後期に平等院に代表される藤原氏等、時の権門により多くの別業が造立されその周囲に人々が住み始めた事によると思われる。現在我々はこの平安時代後期から近世に至る町屋跡を宇治市街遺跡と呼称している。

当遺跡の調査は、昭和56年に調査地の北東 250 m の宇治妙楽160-1番地で最初の調査が実施されており、今回の調査を第2次発掘調査とすることとした。

今回の調査地である宇治番29番地は、宇治橋から宇治商店街を直線的に貫く新町通りと平等院南門前を東西に走る本町通りの交差点のやや東側にあたり、旧宇治郵便局があったところである。昭和59年夏、ここに奈良不動産株式会社よりマンション建設計画が出され、事前協議の結果、工事着手前に試掘調査を実施することとなった。調査を実施するについては奈良不動産株式会社の全面的な協力があり予想以上の成果をあげることができた。また、調査期間中は周辺町内会を始め多くの方々のご協力をいただいた。感謝するしだいである。なお、調査記録及び出土遺物は現在宇治市教育委員会が保管している。

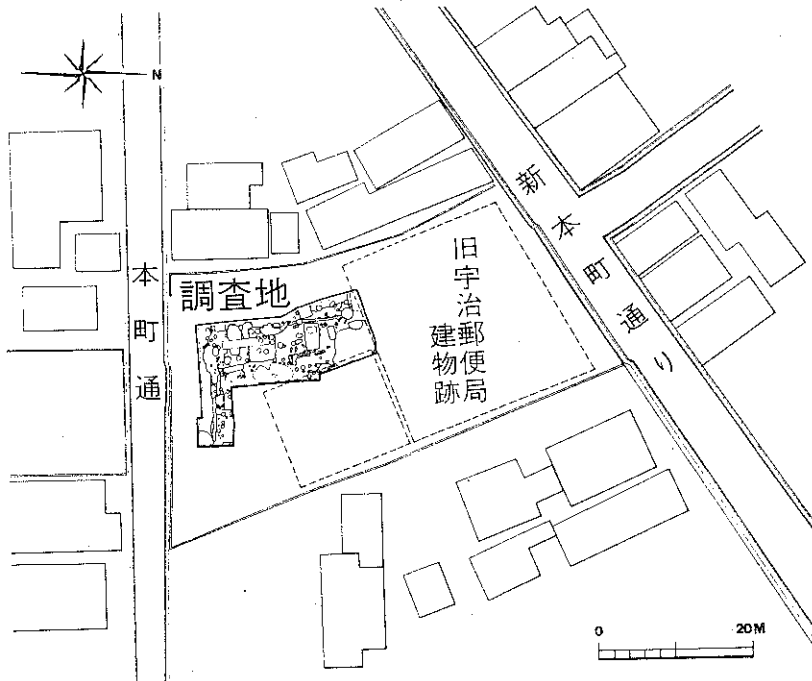


第1図 位置図(1:50000)

## 2. 調査の経過

調査前の現況は、新町通り沿いに建っていた旧宇治郵便局の鉄筋建物がとり壊され全面的に整地をされていた。しかし、鉄筋建物基礎は地中に遺存したままであり、旧郵便局建築時に相当深い部分までの基礎掘削がなされている可能性が高いことより、トレンチは旧郵便局舎をさけるかっこうで本町通り側に「L」字形に設定した。

トレンチの掘削は、手掘りによるグリッド調査で遺構面の確認を行なった後にパワーショベルで遺構面直上までの土砂を排除した。遺構面は基本的には折居川の沖積土である黄褐色砂質土であり、所々に礫層を混じえている。表土下遺構面までの深さは概ね0.4~0.8m程であり、後世の削平が深く及ばない所では数層の遺構面が確認された。また表土下には厚さ0.2m程の淡褐色の耕作土が存在していた。これは「宇治郷総絵図」によれば江戸時代に当地は宇治代官知行の茶園であったらしくこの茶園に関係するものと思われる。調査途中で杉山調査指導委員の現地指導によりトレンチを南北に若干の拡張を実施し調査面積は250㎡となった。遺構検出の概ね終了した12月22日(土)に参加者150名を迎えて現地説明会を実施し、翌年1月15日(祝)に気球による遺構の空中撮影を行なった。遺構の実測等の記録作成作業が完了したのは1月31日であり、その後現地を撤収し試掘調査を終了した。



第2図 調査地周辺図

### 3. 遺 構

今回の調査で検出した遺構は、土壇・溝・井戸・柱穴・道路・石垣等があり、わずか 250 m<sup>2</sup>の調査地内に二百数十箇所検出されている。溝は宅地境界、柱穴は建物の柱跡と思われる。柱穴には、その底部に径10cm程の河原石による礎石を伴うものが多い。しかし、現地点ではそれらがいかなる相関関係にあるか不明である。井戸跡と思われる遺構は2箇所(SE06・SE254)あるが、ともに近世後期から近代に至るものであり、それ以前のものについては検出されていない。

遺構の年代は、平安時代後期より現代に及ぶが、その主体となる時代は鎌倉時代から室町時代までである。江戸時代の遺構がほとんど見受けられないのは前述したように当該地がこの時代に代官知行の茶園であったためであり、その結果として中世の遺構が良好に保存されることとなった。

では、以下において注目すべき遺構の概要を報告し、他の主要遺構については一覧表を作成したので参照願いたい。

**SK38** 調査地西端中央部で検出した円形土壇であり、直径0.8m、深さ0.4mを測る。土壇内には常滑焼大甕1個体分が破片化して多量に含まれており、一部の体部片は土壇壁に密着していた。これは、土壇に埋め込まれていた大甕が破損した後そのまま遺棄された状況を示すのであって、大甕の復元器高が0.65mを測るところより、遺構面が大きな削平を受けていないとすれば甕の下半を地中に埋め込んだ施設であったと思われる。性格については確証はないが「水甕」の可能性が考え得る。

**SK42** 大型方形土壇SK100によって一部が破壊されている方形土壇であり、東西1.6m以上、南北1.25m、深さ0.06mを測る。埋土は灰を多量に含む黒灰色砂質土であり、土師皿を主体に瓦器椀等の食器類が出土している。付近に存在するSK46・SK119も同様な状況である。

**SK43** SK42・SK46の下層にある円形土壇であり、直径0.8m程、深さ0.12mを測る。埋土はSK42と同じように灰を多量に含む黒灰色砂質土であり、土壇底に完形に近い土師皿が3個体遺棄されていた。

**SF91** 調査地南辺部で本町通りに平行して検出した溝状遺構であり、旧本町通りと思われる。検出長は東西約13m、南北約2mであり、道路北肩及び路面の一部を検出している。路面は表土下2.3m、道路北肩より1.4m程下にある。また、道路北肩には断続的に石垣が構築されている。この石垣はSX 250からSX 252の3部分においてその形状を異にする。SX 251





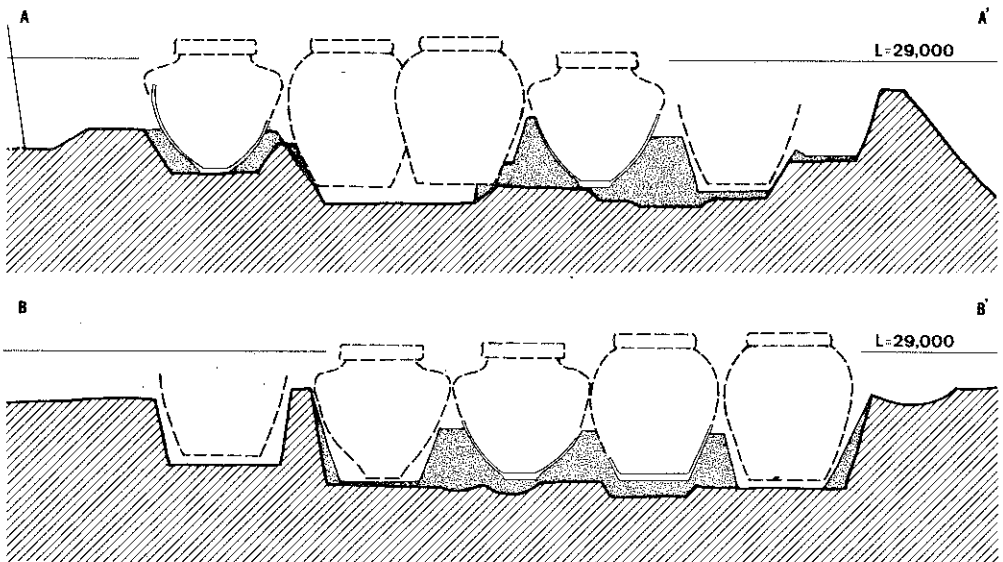
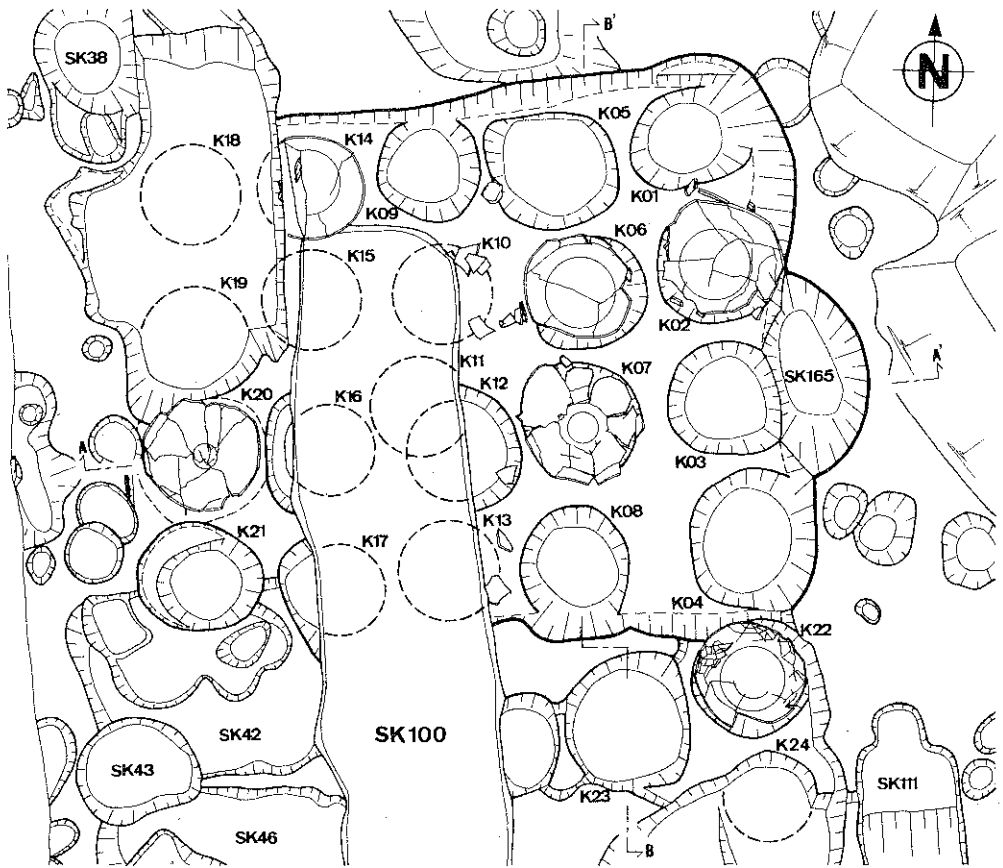
は路面最下部より構築される石垣であり全長約3m、遺存高約0.6mを測る。使用石材は人頭大の河原石である。SK250はSK251に東接して構築されるもので、検出長4.4m、遺存高約0.5mである。使用石材は大型の角礫で、最下段部のみ遺存していた。石垣の詰み始めはSK250より0.2m程高い。SX252はその東端部のみ検出したもので、所謂「石垣」より「石列」に近い。使用石材は河原石である。

埋土は近世の耕作土下大きく4層に分けられる。最下層は暗黄色粘質土であり、極部的に多量の焼土を含んでいる。その上は礫層であり土器類も多く包含している。その上が暗黄灰色土でありこの3層が基本的な埋土である。暗黄灰色土上にある暗茶褐色土はSF91埋没後の置土である。最下層の焼土中及び礫層中には後述するSK100で使用されたと思われる備前焼ないし常滑焼の大甕片が含まれており、SK100付設建物焼亡時(室町時代前期)には元来のSF91の機能が理解され、最上層の暗黄灰色土中からは近世初頭頃の陶器が出土しているため、概ねこのころには路面は遺構面と等しい所まで高あげされたらしい。宇治代官知行の茶園造成はこの後のことで、この前後の時期に現在の本町通りの幅員が決まったと思われる。

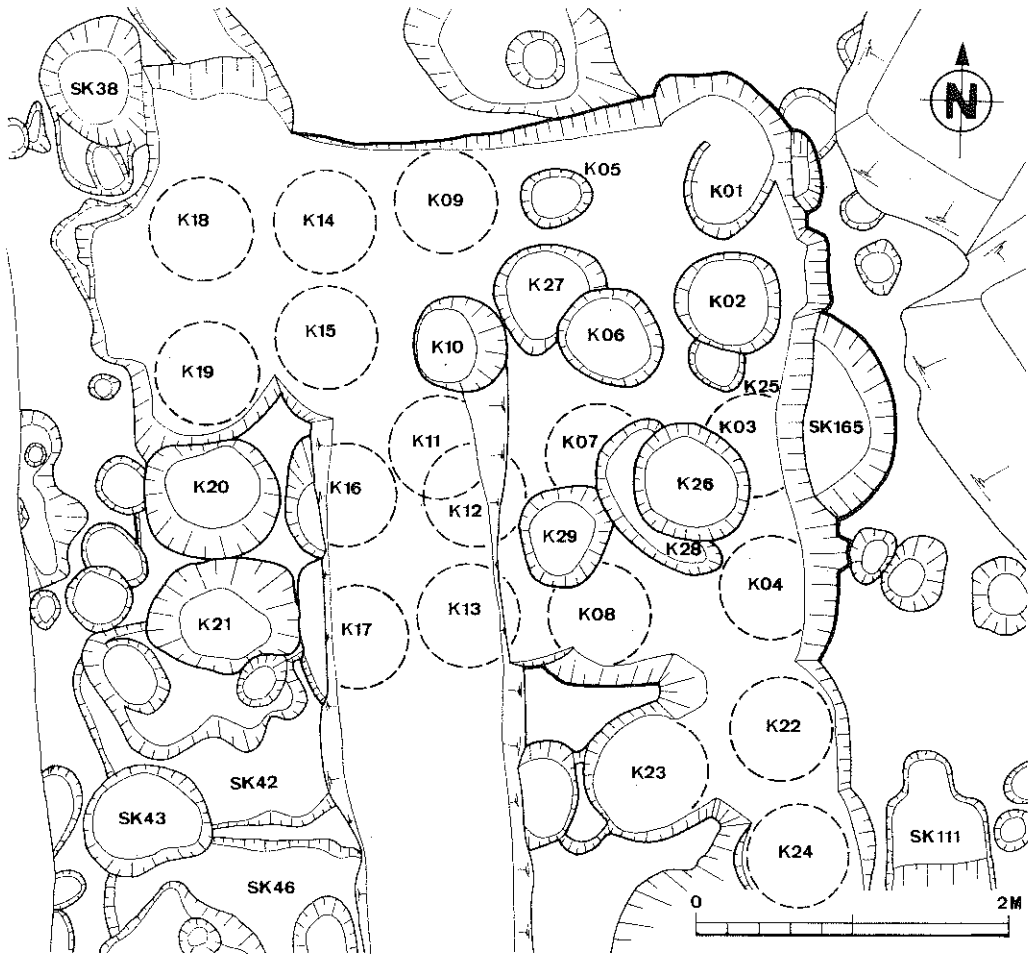
**SK100** 調査地中央で検出した大甕集積であり、常滑焼・備前焼大甕を総数29個分(K01~K29)を埋置した痕跡をもつ。K02・K06・K17・K22では備前焼大甕が、K07・K20では常滑焼大甕が破損状態で遺存していた。他の大甕埋置痕跡中ないし周辺遺構からはこれらの大甕片が多量に出土している。

S K100内の大甕の最終的な埋置状況は大きく3群に分けることができる。すなわちK01~K10・K12~K15の第1群、K16~K21の第2群、K22~K24の第3群であり、大甕数23個であったと思われる。第1群の大甕の埋置方法は、これら14個の大甕を包括する方形土壇を掘削し、南北に4列、東西に4列規則的に大甕をならべ、甕の肩部程まで灰・炭・焼土を含む黒灰色土で埋めている。第2群は大甕6個からなるものと思われ、第1群の甕の配置状況を西に一分と第1群での西端列(K14・K15)の南2個分を増している。第2群の埋置方法は第1群と違い甕個々に地山を掘削し埋置している。第3群は大甕3個からなり、第1群の南東部に増設されたものである。埋置方法については第2群と等しい。また、K23に接する土壇SK255については大甕を埋置した痕跡を確認できなかったが、状況的にはSK100と同時期と考へ得る。第1群の土壇底には下層遺構としての甕の据え付け痕跡が認められ、複数回の甕の抜き取り・据え付けが行なわれたことを窺わしめる。このSK100の廃絶は覆屋の焼亡によるものと思われる。これは大甕K14が多量の灰及び焼けた壁土で一挙に埋没していることから理解でき、火災後に焼け跡整理が実施されている。この整理の中で使用可能な甕は抜きとられ、不能なものは現地に遺棄されたものと思われる。

調査終了後、この大甕片及び付着物の脂肪酸分析を帯広畜産大学の中野益男先生に依頼し



第4図 SK100上面実測図



第5図 SK100完掘実測図

実施することができた。現在なお分析中であるため詳細な資料をここに報告することは不可能であるが、大豆系植物の脂肪酸が検出されたという事であり、本遺構が「ミソ」・「タマリ」の製造もしくは販売に係っていたことが理解される。

**SK200** 径1.3m程の楕円形土壇であり、多量の土師皿を含む。埋土には灰を多く含んでおり、状況的には前述のSK42・SK43に類似する。しかし、遺物の出土量はかなり多く、多量の土師皿を一括投棄した状況を示していた。

表1 主要遺構一覽表

遺構番号	形状	規模(cm) ( )は推定			時代	出土遺物	備考
		東西	南北	深さ			
S E 06	円形井戸	直径(200)		74	江戸	土師器：皿・羽釜、中世陶器：鉢・甕、近世陶磁器。	
S K 39	不定形土坑	128	340	44	江戸	近世陶器、備前焼製。	
S K 46	方形土坑	165	195	21	平安	土師器：皿・高杯、瓦器：椀、須恵器片。	埋土に灰含む。
S K 52	円形土坑	115	113	47	室町	瓦器：羽釜、備前焼：甕、土師器片。	
S D 53	溝	315	30~60	14	鎌倉	土師器：皿、瓦器：椀・鉢・羽釜、中世陶器：鉢、布目瓦。	
S K 73	円形土坑	66	70	33	平安	土師器：皿、瓦器：椀、須恵器片。	
S K 83	方形土坑	320	190		室町	土師器：皿・羽釜、中世陶器：鉢、備前焼製、須恵器片。	表面に粘土張り。
S K 85	方形土坑	(290)	90	31	室町	土師器：皿、瓦器：椀、常滑焼製、布目瓦。	
S D 88	溝	555	20~50	20	鎌倉	土師器：皿。	
S K 107	方形土坑	(140)	(18)	(5)	平安	土師器：皿・高杯、瓦器：椀。	埋土に灰含む。SK46に類似。
S K 109	不定形土坑	26	75	18	室町	土師器：皿、瓦器：椀、中世陶器：鉢・甕。	
S K 110	不定形土坑	190	430	107	室町	土師器、瓦器、中世陶器、輸入磁器。	
S K 111	方形土坑	70	258	154	近代	土師器：皿、瓦器：椀、須恵器：平瓶、甕、中世陶器。	木棒遺存。
S K 112	方形土坑	62	72	46	平安	土師器：皿、瓦器：碗・鉢、須恵器：甕。	
S K 119	不定形土坑	165	170	39	室町	土師器：皿・羽釜、瓦器：椀・羽釜、備前焼製。	埋土に灰含む。
S K 129	方形土坑	40	115	20	平安	土師器：皿、瓦器：椀。	
S K 138	方形土坑	90	210	29	室町	土師器：皿、須恵器、中世陶器。	
S D 156	溝	50	310	20	鎌倉	土師器：皿、瓦器：椀、中世陶器：鉢。	焼土塊遺存。
S D 191	溝	50	686	13	鎌倉	土師器：皿、瓦器：羽釜、中世陶器：鉢。	
S K 219	方形土坑	75	80	74	室町	中世陶器：鉢。	
S K 221	円形土坑	直径 170		51	鎌倉	土師器：皿、常滑焼製。	
S K 253	大型土坑	440		80	室町	土師器、瓦。	
S E 254	方形井戸	(160)	160		近代	中近世陶磁器、輸入磁器。	未完掘。

表2 SK100内大甕一覧表

遺構番号	使用甕	出土遺物及び備考
K01	不明	
K02	備前焼	甕下半部遺存。上半部は不明。焼土検出。
K03	不明	甕片出土せず。
K04	(備前焼)	備前焼甕片。常滑焼甕片。
K05	(備前焼)	備前焼甕片。常滑焼甕片。
K06	備前焼	甕下半部遺存。上半部は甕内より出土。常滑焼甕片。
K07	常滑焼	甕下半部遺存。上半部口縁部肩部はK22より出土。焼土検出。備前焼甕片。
K08	(備前焼)	備前焼甕片。常滑焼甕片。
K09	(備前焼)	備前焼甕片。
K10	不明	掘方底部検出。甕片出土せず。
K11	(備前焼)	備前焼甕片。
K12	(備前焼)	備前焼甕片。
K13	(備前焼)	備前焼甕片。
K14	備前焼	甕下半部遺存。上半部は甕内より出土。焼土・柱炭・壁土検出。
K15	常滑焼	常滑焼甕片。
K16	備前焼	甕下半部遺存。上半部は甕内より出土。
K17	(備前焼)	備前焼甕片。
K18	(備前焼)	SK39により消滅。SK39内より備前焼甕片出土。
K19	(備前焼)	SK39により北半分消滅。南半分より備前焼甕底部出土。
K20	常滑焼	甕下半部遺存。上半分は甕内でほぼ一全体分出土。
K21	(備前焼)	備前焼甕片。
K22	備前焼	甕下半部遺存。上半部は甕内及びK06・K07から出土。甕内よりK07口縁部出土。
K23	不明	甕片出土せず。
K24	不明	甕片出土せず。
K25	不明	下層遺構。甕片出土せず。
K26	不明	下層遺構。甕片出土せず。
K27	不明	下層遺構。甕片出土せず。K06より古。
K28	不明	下層遺構。甕片出土せず。K26より古。
K29	不明	下層遺構。甕片出土せず。K28より古。

## 4. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器：皿・高杯・甕・焙烙鍋・釜、須恵器：杯・平瓶、瓦器：椀・皿・鍋・羽釜・スリ鉢・火舎、中世陶器：皿・壺・甕・スリ鉢、近世陶器：椀・皿・鉢・スリ鉢、輸入磁器：椀・皿・鉢、瓦：軒丸瓦・丸瓦・平瓦、石製品：石鍋、金属製品：釘・銭貨等であり、総数コンテナ箱に50箱程である。量的には土師器皿が最も多く、次いで中世陶器甕であり他は少ない。時代的にはその大半が所謂中世に所属するものである。現在、土器類の整理作業が完了していないため詳細な資料提示が不可能であるが、以下主要遺構についてのみその概要を報告する。

**SK38** 本遺構からは、常滑焼大甕1個体分、土師器皿数個体分、土師器高杯1個体分、東播系スリ鉢1個体分、中世陶器壺・甕各1個体分が出土している。

常滑焼大甕(T01)は、口径44cm、器高66cm程を測り、口縁部は「C」字形に屈曲している。体部の内・外面調整はナデ調整であり、所々に粘土紐巻き上げ痕跡を残す。また、体部外面には所々にスタンプ文様を施す。T02は須恵器系の中世陶器壺であるが産地不明。所謂土師皿(H03~H06)には大・小の2種があり、前者は口縁部に2段のヨコナデを施す。H07は土師器高杯であるが、杯部形状は不明。

T01は赤羽一郎氏の編年によると常滑I期に比定でき、12世紀前半から中頃の年代が考えられている。土師皿の形式も実年代が12世紀前半から中頃とされる平安京内膳町遺跡SE176出土例と類似するため、同時代に本遺構の年代を比定できる。

**SK42** 灰を多量に含む埋土の中から、土師皿数十個体分と瓦器椀・皿が数個体分出土している。土師皿には大・小の2種がある。大皿は口径13.5cm程であり口縁部に2段のヨコナデを施す。小皿は口縁部が単純に立ち上るもの(H08~H10)と、屈曲するもの(H11)とがあり前者が多い。口径は8.5cmから10cm程である。瓦器椀(Z15)は高台が断面台形をなし、椀部が浅いものであり口縁端部内面に一条の沈線をめぐらす。ヘラミガキは体部内面のみで粗い。瓦器皿(Z16)は形態的には土師小皿に似るものであり、体部内外面にヘラミガキを施し内底面にはジグザグ暗文を施す。

このような土器様相は平安京内膳町SD345上層<sup>④</sup>や宇治市街遺跡(妙楽160-1)SE01出土土器群<sup>⑤</sup>と類似しており、概ね13世紀初頭に年代を比定できる。

**SK43** 本遺構からは完形に近い土師皿4個体を始め若干の土師皿片が出土している。土師小皿(H17・H18)はともに口縁部を屈曲させるものであり、SK42出土例(H11)に比べれば形態的に先行するものである。大皿は口縁部を2段にヨコナデするもの(H19)と1段だ

けのもの(H20)とがある。

このような土器様相は、平安京内膳町SD41A<sup>⑥</sup>に類似しており、概ね11世紀中頃から後半に比定できる。

**SF91** 礫を多量に含む埋土より多くの遺物が出土している。量的に多いものは中世陶器類であり、後述するSK100で使用されていたと思われる備前焼等の大甕片を始めスリ鉢などが目立つ。また、瓦類も出土している。

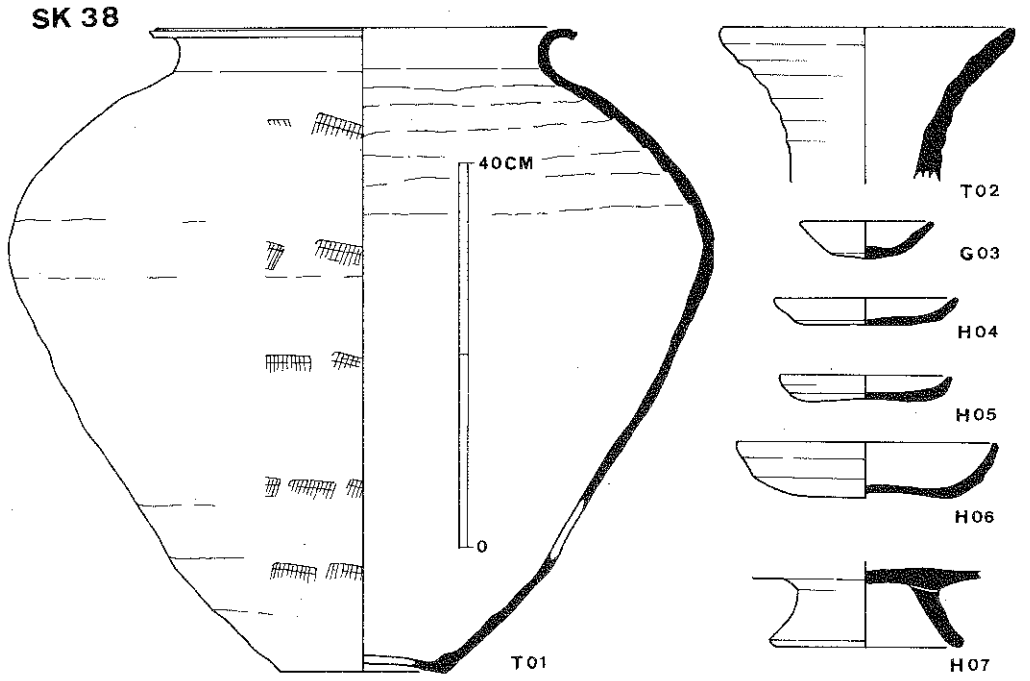
土師器には、皿・甕・大和系と思われる羽釜(H22)・焙烙鍋(H23)等がある。瓦器には、椀・鍋(Z29)・羽釜・火舎(Z24・Z30)・スリ鉢等があるが、全形を窮えるものはない。中世陶器では前述のほか、東播系の甕(T28)・鉢などがある。スリ鉢(T25)は内面の条線を一定間隔で施すもので、紫香楽焼と思われる。輸入磁器には青磁(BG26・BG31・BG32)と白磁(HG35・HG36)とがある。BG26は口縁部が輪花状の盤であり釉調は鮮明である。BG31・BG32は龍泉窯系の椀であり外面にへら描きの蓮弁を施す。HG34・HG35は削り出し高台をもつもので、口縁は玉縁状になるものと思われる。S27は滑石製の鍋である。T36は黄瀬戸の皿であり、T37は唐津焼の皿である。ともに最上層より出土している。

SF91の埋土中の基本的な遺物については、その所属年代を15世紀代に比定できる。

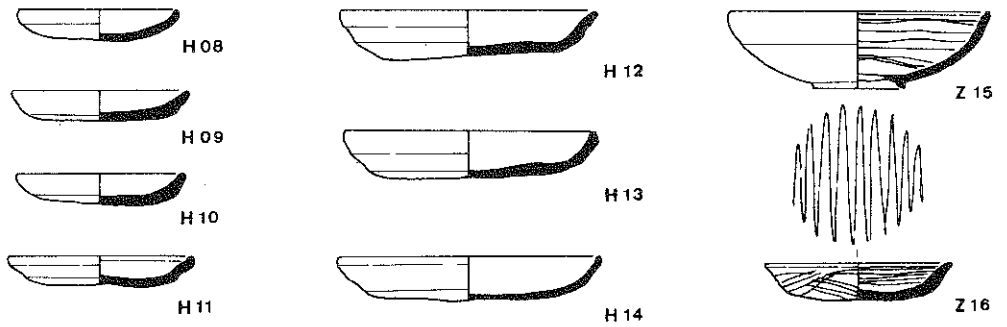
**SK100** 本遺構出土の遺物は、常滑焼の大甕及び備前焼の大甕がある。個体数については廃絶直前において総数23個存在したと思われるが、廃絶時の整理において甕の抜き取りが行なわれており遺存していた大甕は、全形が窮えるものとして常滑焼3個体、備前焼3個体である。しかし、破片を含めた中では備前焼は16個体以上となり、両者の比率は圧倒的に備前焼が高い。

常滑焼で現在復元し得たものはK20出土のT38だけである。口縁部を若干上・下に拡張するものであり、所謂「N」字状口縁の中では古相を示す。体部内・外面はナデ調整であり、外面の所々に一定間隔でスタンプを施す。K15に使用されたと思われる大甕T40もほぼ似た形態を示す。K07使用の大甕T41は口縁部を下方に向かって幅広く拡張するもので、前二者に比べて形式的に新しい。赤羽一郎氏の編年<sup>⑦</sup>によれば、T38・T40は常滑Ⅲ期に、T41は常滑Ⅳ期に比定され、年代的には前者が14世紀中頃、後者が15世紀前半頃となろう。

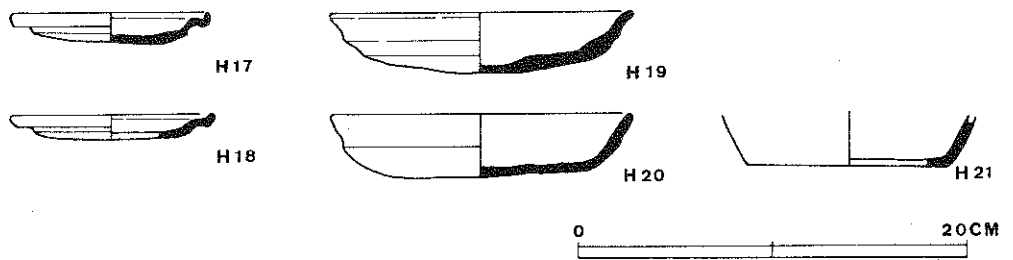
備前焼では復元し得たものはK22出土のT39である。体部外面上半は横方向のハケ調整であり、下半は縦方向のへらケズリを施す。体部内面は丁寧なナデ調整である。このような手法は他の備前焼大甕に共通するものである。また、T39には肩部に「十」字のへら記号が施こされている。口縁部には、口縁端部の折り返しが少なく小さい玉縁をなすもの(T42・T48)と折り返しが大きくやや大ぶりで扁平な玉縁をなすもの(T43~T47・T49・T50)とがあり、後者が圧倒的に多い。間壁忠彦氏の編年<sup>⑧</sup>によれば、前者は備前Ⅲ期に後者は備前Ⅳ



**SK 42**



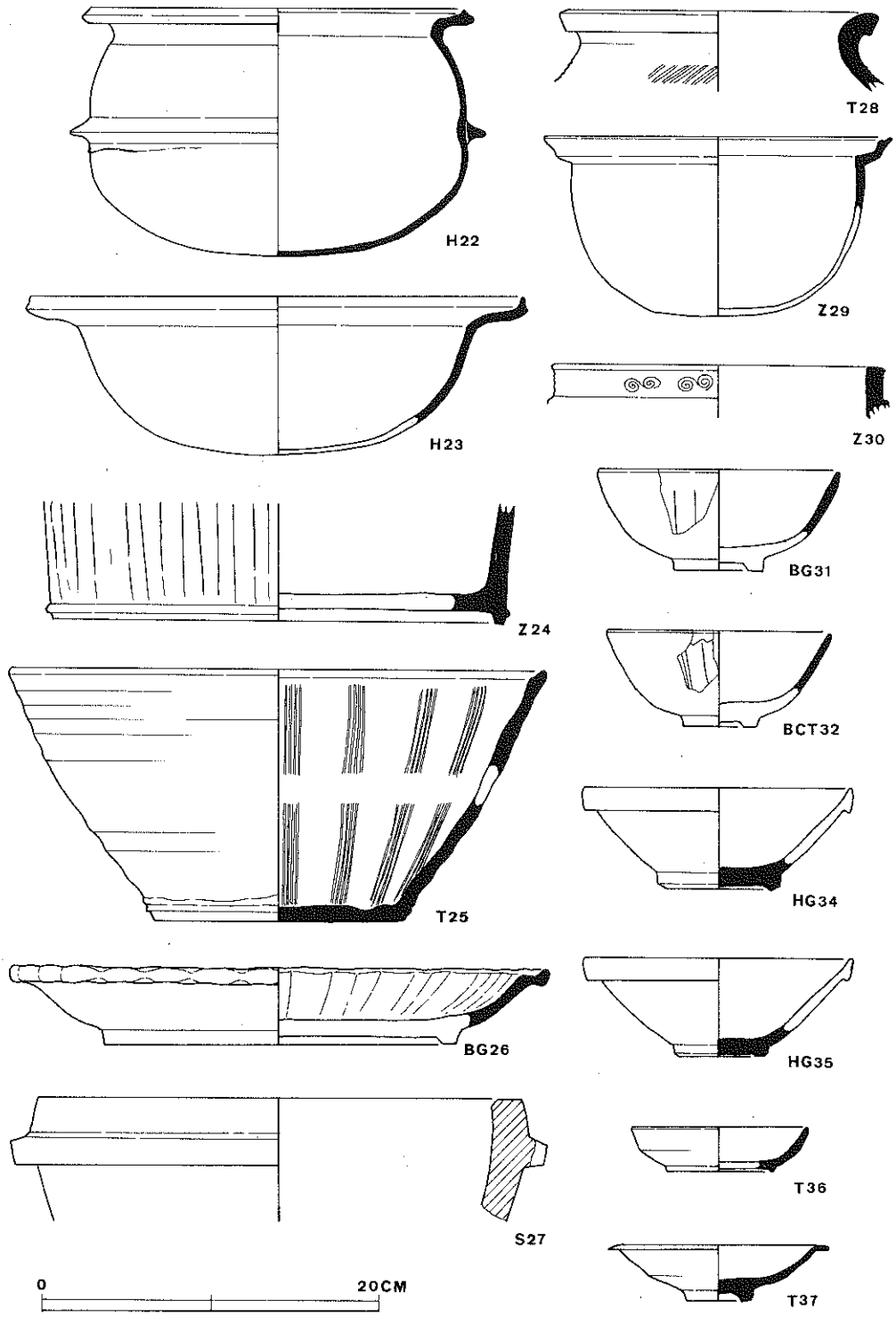
**SK 43**



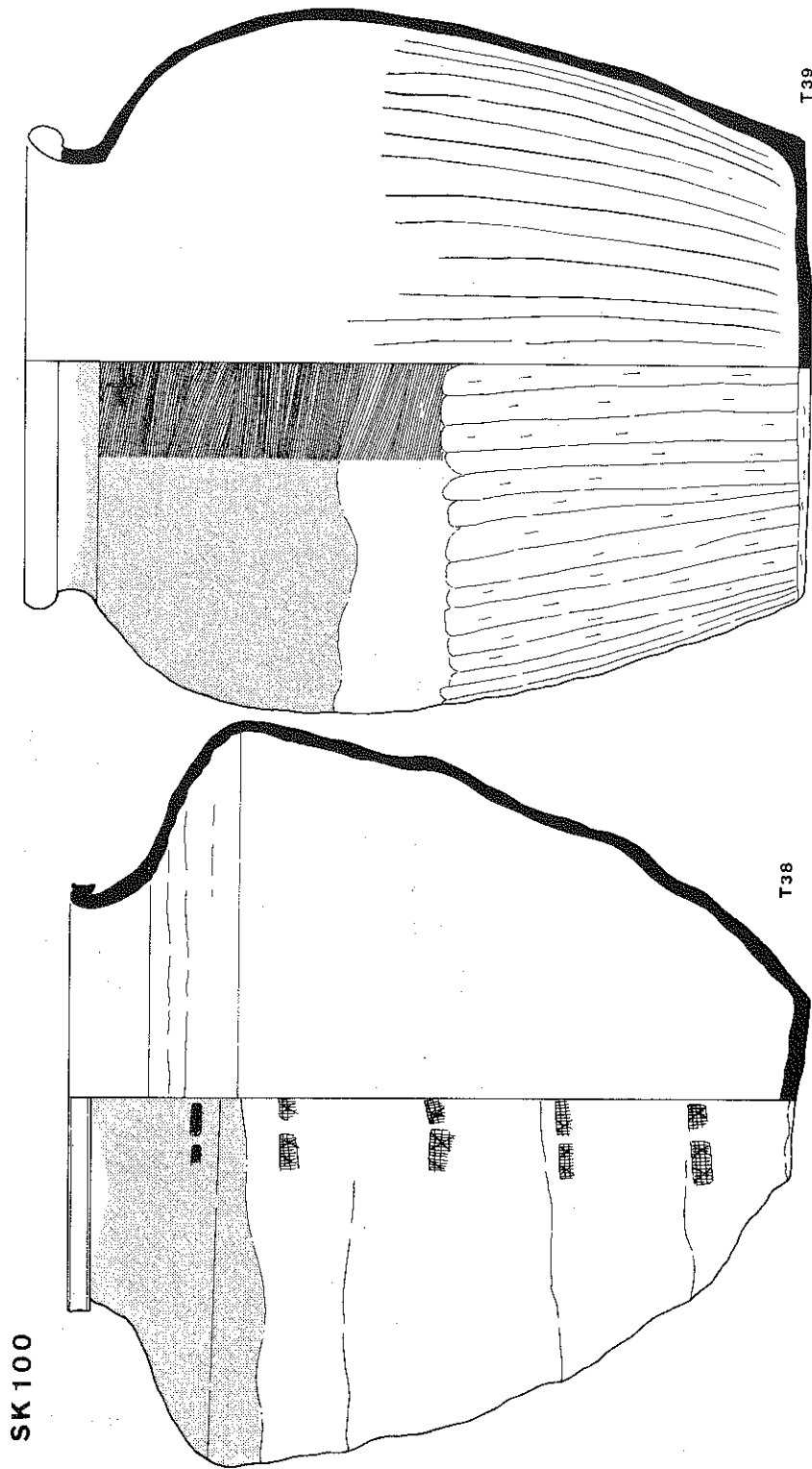
第 6 图 土器実測图 (1)



SF 91

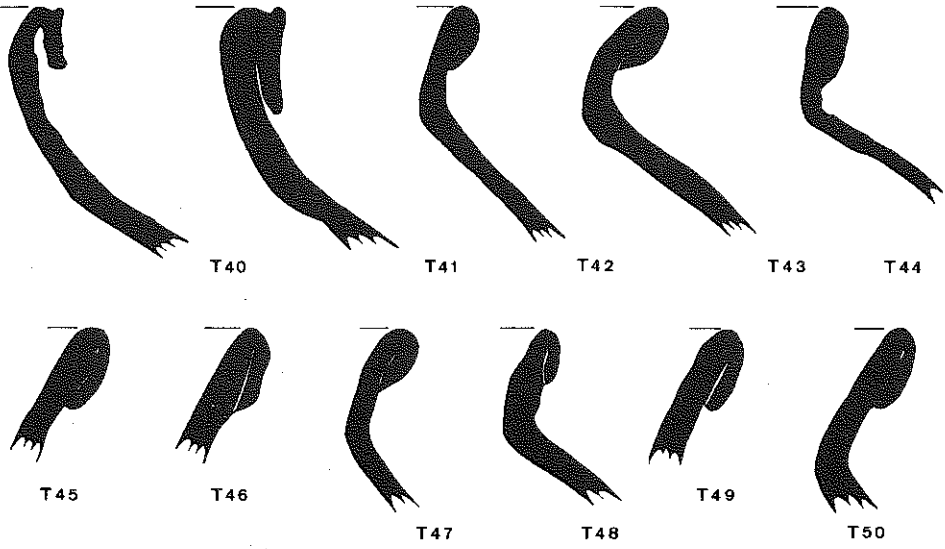


第7図 土器実測図(2)

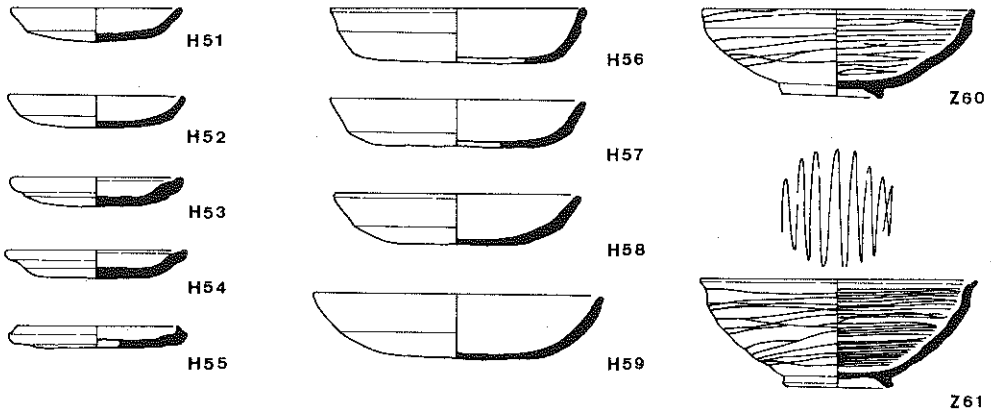


第8図 土器実測図(3)

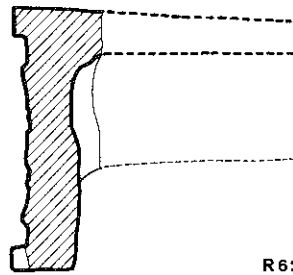
SK 100



SK 200



瓦類



第9圖 土器実測圖(4)

期に比定され、年代的には前者が14世紀後半、後者が15世紀前半頃と考えられる。

**SK200** 本遺構出土の土器はその大半が土師皿であり、他に若干の瓦器椀等を含んでいる。土師皿には大・小の2種があり、後者は形態的に3分類できる。一つは単純に口縁部をおさめるもの(H51・H52)で一般的な形状を示すものである。一つは口縁部を屈曲させるもの(H51・H52)で一般的な形状を示すものである。一つは口縁部を屈曲させるもの(H53・H54)でありSK43出土の土師小皿の後出的なものである。もう一つ口縁部を内側に屈曲させるもの(H55)である。ともに口径は9cm程である。大皿は基本的には1タイプのみで、口径は13.5cm程のものが多い。

瓦器椀は体部内外面にヘラミガキを施すもので、内底面にジグザグ暗文を施す。

このような土器様相は平安京内膳町SE288下層<sup>⑤</sup>と類似しており、概ね12世紀後半頃に比定できる。

**瓦類** 包含層中及び遺構埋土中より総数コンテナ1箱分程が出土している。軒瓦は軒丸瓦が2点出土しており、図化した1点(R62)と三巴文小片1点である。平瓦は大半が縄目タタキを有すものであるが、少量山形のタタキを有すものがある。

R62は調査地北端部のSK253内より出土した軒丸瓦であり、主文は復弁六弁蓮華文である。中房には二巴文を配置する。周縁は平坦縁である。このような文様も有すものは河内産とされるもので、河内向山瓦窯<sup>⑥</sup>で製産されたことが指摘されている。年代的には12世紀末葉を中心とする時期が考えられている。

以上のような中世土器群に混じって少量ではあるが奈良時代から平安時代前期頃に比定される須恵器が出土している。器形としては杯を主体として他に甕・平瓶がある。これらはすべて混入品として後世遺構等より出土しており、一括遺物はない。

## 5. ま と め

宇治市街遺跡をめぐる2～3の気付いた点を簡略に述べまとめとする。

**遺跡の成立年代** 宇治市街遺跡の成立については、すでに述べたように平安時代後期に平等院(1052)に代表されるごとく当時の権門であった藤原氏を始めとする中央貴族が当地に壮大華麗なる別業を造立し、その周囲に人々が住み始めたことによると思われる。このような所謂宇治の町屋成立に関する文献資料に『中右記』がある。これによると、寛治七年(1094)11月6日に宇治の民家が多数焼失するとあり、11世紀末頃にはすでに町屋として成立していたことが推測される。今回の調査の中ではSK43が11世紀中～後半頃に比定される遺構としてあげられるが、同時期のものは総体的に少ない。これは第1次調査出土土器においても同様である。土器量が急増するのは12世紀後半から13世紀にかけてであり、現在の調査成果の中ではこの時期を宇治の町屋の発展期として考え得る。調査後の検討が不充分のため、町屋を構成していた家屋の規模等については現時点においては不明であるが、道路(SF91)と柱穴等の関係から考えるならば、これら家屋は道路に面して間口を設け近接して建てられていた状況を推測し得る。

**SK100** 本遺構の性格については前述したように「ミソ」・「タマリ」に深く関係する事実が脂肪酸分析の結果明らかとなっている。このように大甕を十数個から数十個単位で土坑内に埋置する遺構の類例として、福井県の一乗谷朝倉氏遺跡がある。この遺跡は天正元年(1573)織田信長によって亡ぼされるまでの朝倉氏の居館とその城下町であり、現在その全容が解明されつつある。ここでは総数20ヶ所の同様な遺構が町屋跡から検出されており、甕の埋設方法・埋土の状況はSK100に類似している。

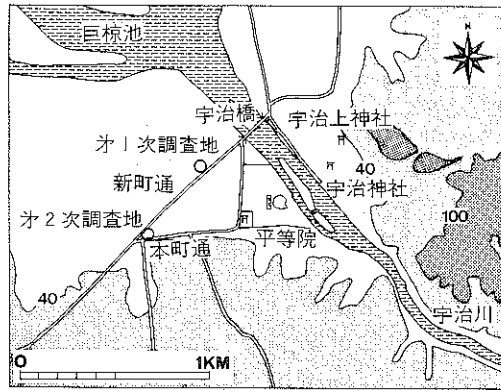
甕を多数埋置し使用するものとして正藍染を行う「紺屋」が著名であり、現在でもその施設を見ることができる。この藍甕も複数の大甕をその肩部まで埋めており、状況的にはSK100に極めて近い。このように藍甕を土中に埋め込むようになったのは木綿の普及と関係があるとされ、概ね15～16世紀のこととされておりそれ以前は藍甕を地面に置いていたらしい。SK100についてはその性格が明らかとなったが、同様な遺構がすべて「ミソ」・「タマリ」と必ずしも関係しないであろうという事は、この藍甕の問題から窮えるのであり、今後これら遺構の内容物の分析を積極的に実施する必要がある。

さて、本遺構の年代についてであるが、大甕の形式が示す年代からは14世紀中頃から15世紀前半がその存続年代として考え得るが、本遺構は調査地一帯を含む火災によって廃絶しており、この火災の年代を究明できればその廃絶の実年代を割り出すことが可能である。現在

表3 14・15世紀の宇治の火災

西 暦		記 事	出 典
1311	応長元年	宇治橋が焼け落ちる。	統史愚抄
1333	正慶二年	足利高氏が八幡・山崎・宇治などの人家に放火し、京都に攻め入る。	統史愚抄
1336	建武三年	楠木正成・畠山高国が合戦し、宇治・槇島の民家が焼失、平等院も兵火にかかる。	真乘院文書、 太平記
1365	貞治四年	平等院廻廊20余間が焼失する。	大乘院日記目録
1457	長祿元長	山城土一揆が宇治を襲撃し、住家などに放火する。	経覚私要録
1468	応仁二年	山科・勧修寺・醍醐・木幡辺に戦火がせまり、宇治の住人が避難をはじめて騒然となる。	後法興院記
1479	文明三年	日野富子の神明社参詣に際し、羽戸繩手道路掃除の区域割をめぐって、この日、宇治郷と三室戸の住民が争い、三室戸側が宇治橋東北住家に放火して橋寺放生院を類焼させ、両方に多数の死傷者を出す。	後法興院記、 長興宿禰記
1480	文明三年	道路掃除境争論により、三室戸住民が宇治橋を五間焼き落したため、従来の人々は舟を利用して槇島を通行する。ついで、幕府は宇治衆・東福寺領地下人などに、橋を焼いた張本人の追放および橋再建を命じる。	大乘院寺社雜 事記、九乗家 文書
1483	文明五年	畠山政長方の水主城が畠山義就勢に攻撃されて落城し、義就軍の宇治接近に備えて宇治橋の橋桁が引かれ、また宇治・広野・寺田の放火により、平等院・神明社を残して全焼したという。	後法興院記、 大乘院寺社雜 事記
1494	明応三年	山城国人衆の要請により、三好七郎二郎勢が三上与次郎勢を宇治に攻め、周辺に放火する。	後慈眼院殿記
"	"	宇治大路氏の内紛によって合戦があり、当主が宇治から敗走して館に放火され、この騒乱を伝える平等院の鐘声が京都まで届いたという。	後慈眼院殿記

残された文献には15世紀代の宇治の火災について3回記録<sup>⑬</sup>されている。最初は長祿元年(1457)の山城土一揆による火災、次いで文明15年(1483)畠山政長による宇治放火、明応三年(1494)三好七郎二郎勢による宇治放火である。SK100使用大甕の年代が15世紀前半を最後としていることを考えれば長祿元年の火災による廃絶を推定することもあながち無理ではないと考える。



第10図 調査地周辺の古道と寺社

瓦類 河内向山瓦窯産の瓦については最近江谷寛氏による論考<sup>⑭</sup>があり、その出土地についても詳しく調べられている。出土地はつぎのごとくである。法勝寺・平安京内膳町・平安京左京八条三坊・平安宮中和院・醍醐寺・仁和寺・法金剛院(京都市)、東大寺・興福寺(奈良市)、難波宮(大阪市)、山城綴喜天神社(不明)、宇治市内では平等院と三室戸寺より出土している。かつて宇治には藤原師実の宇治泉殿、藤原頼通の娘寛子の池殿法生院、藤原忠実・頼長父子の小松殿成樂院・西殿等の別業が平等院周囲に造立されていた。これら諸別業の正確な位置については現在不明といわねばならないが、今回の調査で河内向山瓦窯産瓦のように皇室・藤原氏と関係が深いとされる瓦をはじめ少量ではあるが瓦類が出土していることは付近にこのような諸別業が存在していた可能性を示すものかも知れない。

宇治市街遺跡は現在その大半が宇治橋商店街等の民家が建ちこんでおり、まがりなりにも面的調査が実施できたことは今回が初めてである。調査の結果得られた資料は当初の予想をはるかに上廻る良好なものであり、宇治の発展を具体的に解明するうえで重要な調査であったと考える。本遺跡の調査はまだ始まったばかりであり今後の成果が注目される。

〔注〕

- ① 吉水利明・杉本 宏「宇治市街遺跡発掘調査概報」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第1集、宇治市教育委員会、昭和57年)
- ② 赤羽一郎「常 滑」(『世界陶磁全集』3日本中世、小学館、昭和52年)
- ③ 平良泰久他「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1980-3、京都府教育委員会、昭和55年)
- ④ 注③に同じ。
- ⑤ 注①に同じ。
- ⑥ 注③に同じ。
- ⑦ 注②に同じ。
- ⑧ 間壁忠彦「備 前」(『世界陶磁全集』3日本中世、小学館、昭和52年)
- ⑨ 注③に同じ。
- ⑩ 江谷 寛「河内・向山瓦窯の瓦」(『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズII、昭和60年)
- ⑪ 水野和雄氏のご教示。
- ⑫ 遠藤靖夫「藍の歴史と技法」(『正藍染』日本の染織16、泰流社、昭和52年)
- ⑬ 宇治市役所『宇治市史年表』昭和58年。
- ⑭ 注⑩に同じ。